

日本ブロンテ協会

第36回大会プログラム

日時 2021年10月16日(土) 10時から16時まで

場所 Zoom 開催

★開場 9:50～

総合司会 日本大学教授 田村真奈美

★開会の辞 10:00

元川村学園女子大学教授 田中淑子

★研究発表 10:10～12:10

司会 近畿大学准教授 菟原美和

1. キャロラインに吹く「西風」—『シャーリー』における与え合う女たちと負債

成城大学非常勤講師 大澤 舞

2. 没後200年—マリア・ブランウェルに思いを馳せる

鈴鹿工業高等専門学校講師 古野百合

司会 立正大学教授 大野龍浩

3. 空間を掌握する魔女たち—『嵐が丘』と「白雪姫」

東京都立大学助教 佐久間千尋

4. English Literature as Therapy: ブロンテ姉妹を発端に

埼玉大学名誉教授 宇田和子

——休憩——

★総会 13:00～13:30

司会 駒澤大学教授 川崎明子

★奨励賞講評 日本ブロンテ協会奨励賞審査委員長 大東文化大学名誉教授 栗栖美知子

★会長挨拶

青山学院大学名誉教授 橋本清一

★シンポジウム 13:40～15:50 「アン・ブロンテ生誕200年」

司会・発題者 中央大学教授 大田美和

発題者 東京藝術大学准教授 侘美真理

発題者 元関西外国語大学教授 渡千鶴子

発題者 早稲田大学教授 木村晶子

★閉会の辞 15:50

横浜市立大学名誉教授 白井義昭

研究発表

1. 「キャロラインに吹く「西風」—『シャーリー』における与え合う女たちと負債」

成城大学非常勤講師 大澤 舞

C. ブロンテ『シャーリー』の第25章「西風が吹く」の冒頭、『ジェイン・エア』でロチェスターを救った「かぐわしい風」のように、窓から「澄みきった西風」がキャロライン・ヘルストンのもとに「優しく吹き込んで」くる。その風は、女性同士のつながりによる困難の克服を示唆する。キャロラインは結婚か「老嬢」となる運命かという人生の選択肢に絶望して病気になったが、プライア夫人から母親だと明かされた後に、吹き込んできた「西風」が彼女の病いからの回復を予兆するからである。その一方で本作は、ラッドライト運動を背景とした産業小説の形式を踏まえている。ブロンテはなぜ、そしてどのように、この男性同士の階級闘争という枠組みのなかに女性同士の結びつきのテーマを組み込んでいるのだろうか。本発表では、「与え合う」行為の含意に着目し、結婚による幸せや未婚のままの自立とは異なる、中流階級女性の生き方の新たな可能性を考察する。

2. 「没後200年—マリア・ブランウェルに思いを馳せる」

鈴鹿工業高等専門学校講師 古野 百合

ブロンテ姉弟妹の母親、マリア・ブランウェルの伝記が2冊相次いで2019年に出版された。ジャーナリストでもあるSharon Wrightは、マリアの生涯とペンザンスの風土について、史実に基づき描きながらも想像力を交えて浮き彫りにする。またJoetta Hardieは、ブランウェル家一族の末裔から得た貴重な資料に加え、ペンザンスや近辺の公的機関の協力を得て入手した母方のカーン家一族に纏わる膨大な記録を列挙する。偉大な作家に与えた母親の生涯についてどうしてこれまで論じられてこなかったのか。マリアの没後200年の節目となる今年、彼女の生涯に思いを馳せてみたい。

3. 「空間を掌握する魔女たち—『嵐が丘』と「白雪姫」

東京都立大学助教 佐久間 千尋

本発表では、『嵐が丘』(*Wuthering Heights*, 1847)をおとぎ話の観点から再考したい。ブロンテ姉妹の小説とおとぎ話の相関性については、先行研究において論じられてきた。「シンデレラ」や「美女と野獣」をはじめとしたおとぎ話の要素を分析した批評が数多く存在するなか、『ジェイン・エア』(*Jane Eyre*, 1847)と比較すると、『嵐が丘』における分析はそれほど多くはないように見受けられる。本発表では、グリム兄弟(Jacob and Wilhelm Grimm)による『子どもと家庭の童話集』(*Kinder- und Hausmärchen*, 1812-15)の「白雪姫」にみられるモチーフをもとに『嵐が丘』を分析し、作品中の“witch”が指し示す対象を検討する。語りと空間の観点からテキスト相関性を考察することにより、語り手ネリー・ディーンの新たな側面を顕在化し、第二世代のキャサリンとの潜在的な絆を解き明かすことを試みたい。

4. 「English Literature as Therapy: ブロンテ姉妹を発端に」

埼玉大学名誉教授 宇田 和子

ブロンテ家のきょうだい達は幼少より、物語や詩を作ることに喜びを見出し、音楽に親しんで成長を遂げた。文芸や音楽が心を明るくする状況は、3姉妹の小説にも見出せる。しかし、書籍や音楽による心の癒しは、人間の歴史と共に存在していたと考えられる。『聖書』にも、古代エジプトにも、西洋古典哲学にも、言葉や音楽の効用が描かれている。時は進み、Shelleyは詩を弁護した。Gaskellは長男を失った悲しみを癒すため、作品を書き始めた。そして、傷付いた心を癒す手段として文学や音楽を使用す

ることは、2つの世界大戦を機に進展し学問として確立するようになった。今日では、Bibliotherapy や Music Therapy は、世界中で学会活動が行われ実践されている。だが、英語文学が therapy 機能を持つことは、英語文学研究世界では、十分に認識されていないと思われる。本発表では、ブロンテ姉妹を導入に、workshop を加え、英語文学が心の癒しの一手段となりうることを検証する。

シンポジウム

シンポジウム「アン・ブロンテ生誕 200 年」

昨年7月のブラッドフォード文学祭では、パネルディスカッション"Anne Brontë: In Her Own Words"がオンラインで開催され、アン・ブロンテ再評価を促す書物を出版した二人の著者の発言を見守る、ブロンテ学者マリアン・トールマレンの温かく思慮に満ちた発言が印象に残った。私たちもそれぞれの視点でアン・ブロンテ文学の魅力を語り合い、危機の時代に言葉と文学の力を取り戻すささやかな努力を続けたい。

アン・ブロンテの再発見

中央大学教授 大田 美和

文学研究の最盛期にやや遅れる形で再評価の始まったアン・ブロンテは、いまだに精読による新しい発見の可能性を有している。この精読と分析は、紙魚のように文学テキストに淫した世代の得意とするところであろう。アン・ブロンテのあまり引用されないようなパッセージを取り出して、テキストの隠れた魅力に迫りたい。その作業は、ジェントリー階級の生活を姉二人よりも長期間に身近で観察したアン・ブロンテの強みの確認にもつながるだろうし、イギリス文学史の中にアン・ブロンテのテキストを開くという作業にもなるだろう。コロナ禍の下、同じような興味や関心を持つ者が異なる視点や意見を共有する機会は貴重であるので、司会者としての私の発言は最小限にして、3人の講師の発言をつなぎ、会場に広げて、文学と文学研究の歓びを語り合う時間としたい。

『アグネス・グレイ』における植物と語りの有機的關係

東京藝術大学准教授 侘美 真理

ブロンテ姉妹の自然観は各作品に反映され、たとえば『アグネス・グレイ』では動物や植物への慈しみが説かれており、ここにアンの自然観や当時の自然神学の変化を読みとくことができる。一方、自然の事物は登場人物たちのコミュニケーションにおいても言葉以上に重要な役割を果たしている。本発表ではアグネスの植物に対する関心に注目し、語りとの関係を検討する。ヴィクトリア朝に一般的な、花言葉によるコミュニケーションが物語の隠れた感情を伝えるとされるが、植物を利用するのは、アグネスにプリムラの花を手渡す男性側（トムとウェストン氏）であり、むしろアグネスや女性たちは花言葉から生まれる誤解やすれ違いを利用し、より深い感情を押し量ろうとしているようでもある。19世紀前半における女性の植物学への関心を紹介しつつ、アグネスの語りの戦略に迫りたい。

ギルバートの結婚の先に見る性の多様性

元関西外国語大学教授 渡 千鶴子

『ワイルドフェル・ホールの住人』の第2版の序文から、アン・ブロンテは男女対等のスタンスを取

る作家であることは容易に推察される。主人公ヘレンは当時としては画期的で戦闘的な道歩んだ女性として描かれている。

では、ヘレンの第2の夫であるギルバートはどのようなタイプの男性として描かれているのだろうか。さまざまな見解があるが、当時の男性としてはまれに見る男女平等意識に目覚めた男性であったといえるだろう。しかし、男女平等意識を持ち妻の立場を重視する彼が、なぜヘレンの言葉を裏切って、日記をハルフォードに見せたのであろうか。その理由を探れば、ギルバートの多様な性の一面が見えてくるのではないだろうか。入れ子構造の外枠であるギルバートがハルフォードに宛てた長い手紙に焦点を当てて、ギルバートの一側面を検証することによって、アンの作家としての多才で優れた技量を垣間見たい。

新たな〈女性のゴシック〉としての『ワイルドフェル・ホールの住人』

早稲田大学教授 木村 晶子

『ワイルドフェル・ホールの住人』は、ブロンテ文学の中で最も過小評価されてきた作品に思える。本発表では、18世紀後半のアン・ラドクリフ以降、現代にまで続く〈女性のゴシック〉の系譜に位置付けて解釈することによって、この作品を再評価したい。不幸な結婚生活の現実、当時の有産階級の男性の道徳的墮落や既婚女性の社会的立場を見事に描き出し、宗教的・道徳的テーマが重要なリアリズム文学としての意義をもつ一方で、この作品には、シャーロットやエミリの小説と同じく、明らかにロマン主義的・ゴシック的特色が見出せる。ただ、ヒロインの造形やセクシュアリティの表現、他者やコミュニティとの関係性など、ここには姉たちの文学とは異なる形の、アン独自の先進性があると思われる。そうした観点から、アンの文学の魅力を明らかにしてみたい。